

自然化された道徳の実践と実在性へのコミットメント

金杉武司 (Takeshi Kanasugi)
國學院大學文学部

自然化された道徳の実践とはどのようなものでありうるか。それは、従来の道徳的実践とは根本的に異なるものになるのではないか。そうである場合、道徳の自然化を受け入れるべきなのか。本提題では、これらの問いについて、実践と実在性へのコミットメントの関係に留意しつつ検討したい。

具体的にはまず、道徳の自然化の議論において最近、注目されている「規範性に対する工学的アプローチ」について検討することから始める。工学的アプローチは、元々認識論の自然化の文脈においてW・V・O・クワイン(Quine[1986])によって提案されたものであるが、植原亮(植原[2017])など近年の自然主義者たちは、このアプローチを道徳にも当てはめることを提案している。工学的アプローチは一般に、規範性を道具的な価値と結びつけて理解するものであり、道徳的な規範性もまた、道具的な価値としての道徳的価値と結びつけて理解することになる。しかし、われわれの道徳的実践の中心にあるのは、内在的な価値としての道徳的価値ではないか。自然主義は、そのような内在的な道徳的価値をどのように説明するのか。本提題はこのような問題提起から始める。

自然主義の一つの選択肢は、「人間の自然本性」や「人間にとっての必要性」に関する自然的事実によって内在的な道徳的価値を説明することだろう(cf. フット[2014])。これらの説明は、「道徳的な善さとは、自然本性に従うことや必要性を満たすことの本質的な一部であり、自然本性に従うことや必要性を満たすことに内在的な価値があるがゆえに、道徳的な善さには内在的な価値がある」という形で、内在的な道徳的価値を説明しようとしていると理解できるだろう。しかし、道徳的な善さは本当に、自然本性に従うことや必要性を満たすことの本質的な一部にすぎないものなのだろうか。

この疑念を正当化しようとする一つの議論は、「開かれた問い(open question)」論法によるものである。「自然本性に従うことは善であるのか」という問いや「必要性を満たすことは善であるのか」という問いは、何らナンセンスな問いではなく、議論の余地のある「開かれた問い」であるように思われる。本提題では、道徳的理由の有無が状況依存的に決まることを指摘した田村圭一の議論(Tamura[2006] p. 31)や、道徳的価値が道徳的実践の外側の観点(自然主義的な観点はそのような外側の観点到に他ならない)からは特定できないことを論じたJ・マクダウエル(マクダウエル[2016])に基づいて「開かれた問い」論法による自然主義批判を擁護することを試みる。

しかし他方で、仮に道徳的な善さが、自然本性に従うことや必要性を満たすことの本質的な一部であるとしても問題は残るよう思われる。「道徳的な善さ」の中には、権利の尊重や功利の最大化、徳などのさまざまな道徳的価値が含まれるが、それらの優先順位はどのようにして決まるのだろうか。それは、単にそれらのどれもが自然本性に従うことや必要性を満たすことの一部であるということに訴えるだけでは決まらない。それらの道徳的価値は量的には比較不可能であり、その優先順位は状況依存的である。そして、この道徳的価値の優先順位もまた、道徳的実践の外側の観点からは

特定できないように思われる。本提題では、この点をもう少し詳しく考察してみたい。

以上の「道徳的価値は道徳的実践の内側の観点を採用することなしには特定できない」という論点に対しては、「それでは、道徳的価値の決定が恣意的なものになってしまうのではないか」という懸念があるかもしれない。自然的な事実がそれを決定しないのだとしたら、何がそれを決定するのか。このような懸念から生じうる自然主義の側からの反論の一つは、「欲求や情動といった主体の主観的な評価的態度が道徳的価値の有無や優先順位を決めている」という道徳的判断に関する非認知主義である。この考えによれば、内在的な道徳的価値とは、もはや行為それ自体が持つ実在的性質ではなく、実のところ、主体の主観的な性質なのである。このような考えは、行為が持つ実在的性質としての道徳的価値を否定しているという意味で「反実在論」と呼ばれる。

しかし、この種の反実在論が正しいとしたら、道徳的な規範性は、「...という評価的態度（欲求・情動）を持つならば、～すべきである」という仮言的な性格を持つものであることになるだろう。それに対して、われわれの従来道徳的実践は、道徳的規範性を、そのような評価的態度を持つものが持つまいが従うべきものであるという意味で定言的な性格を持つものとして位置づけているのではないか。そして、それは、道徳的価値が評価的態度に関わりなく行為に帰属する性質として実在することにわれわれがコミットしているからではないか。このように反実在論的に自然化された道徳の実践は、従来道徳的実践とは大きく食い違うものになってしまうように思われる。本提題では、自然主義に対するこのような反論の可能性を検討する（ここでは、錯誤理論に基づく、自然主義の側からの再反論についても検討したい）。

最後に、自然主義を採用することにより、道徳的価値の実在性にコミットする従来道徳的実践が維持されないとして、その何が問題なのかという疑問について検討する。この疑問に対しては、何が実在するかという問題は、われわれがどのような実践に参与すべきかという問題と切り離して考えることはできないということ、そして、われわれが、道徳的価値の実在性にコミットする従来道徳的実践に参与すべきであるのか、それともそれを否定する自然主義的な道徳的実践に参与すべきであるのかは、未決の問題であるということ、この限りでは、自然主義的な反実在論の正しさを前提して実在論的な従来道徳的実践を否定することは独断的であるということ論じる。

参考文献

- Quine, W. V. O. [1986] 'Reply to Morton White', in L. Hahn & P. Schilpp (eds.), *The Philosophy of W. V. Quine*, La Sall, Ill.: Open Court, 1986.
- Tamura, K. [2006] 'A Sketch of a Non-naturalistic Version of Moral Realism', 『倫理学年報』第55集, 27-41頁, 2006年.
- 植原亮 [2017] 『自然主義入門—知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー』勁草書房.
- フット, フィリップ [2014] 高橋久一郎 (監訳) 河田健太郎・立花幸司・壁谷彰慶 (訳) 『人間にとって善とは何か—徳倫理学入門』筑摩書房.
- マクダウェル・ジョン [2016] 荒畑靖宏 (訳) 「非認知主義と規則順守」, ジョン・マクダウェル, 大庭健 (監訳) 『徳と理性—マクダウェル倫理学論文集』勁草書房, 所収.